慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アルピルスバッハ僧院教会の建築
Sub Title	Der Bau der Klosterkirche Alpirsbach
Author	渋谷, 勝久(Shibuya, Katsuhisa)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1968
Jtitle	哲學 No.53 (1968. 9) ,p.211a- 222a
JaLC DOI	
Abstract	Die Klosterkirche Alpirsbach gehort zur sogenannten Hirsauer Schule, die unter dem Einfluss von Cluny steht. Die von dem. franzosischen Benediktinerkloster Cluny ausgehende Reform besteht in einer liturgischen Neuordnung, die sich im Baustil als Ruckbesinnung auf die ursprungliche christliche Gestalt auswirkt. Dieser cluniazensischen Bewegung schloss sich Kloster Hirsau im Schwarzwald an, das seinerseits mehr als hundert Kirchen reformierte. Wahrend jedoch St. Peter und Paul in Hirsau heute fast vollig zerstort ist, lasst sich der Hirsauer Geist in der nicht weit davon entfernt gelegenen Klosterkirche Alpirsbach noch sehr deutlich erkennen. Alpirsbach ist eine nachgedeckte Saulenbasilika und verzichtet als Wegbau wie alle Kirchen der Hirsauer Schule auf Westwerk und Krypta. Entsprechend der hierarchischen Gliederung des Konvents ist die Kirche in verschiedene in ihrer Bedeutung abgestufte Teile eingeteilt. Dem Altarhaus nach Westen in der Vierung vorgelagert ist der Chorus maior, der durch ein Paar kraftiger Saulen von dem sich ihm anschliessenden Chorus minor abgetrennt ist. Dieser wiederum wird durch Pfeiler von dem ubrigen, den Laien vorbehaltenen Teil der Kirche sbgeschieden. die klare Uberschaubarkeit des Grundrisses-das quadratische Grundrissschema in der Gestalt des lateinischen Kreuzes mit einem Atrium im Westen wird streng beachtet-sind Beweise fur die Einfachheit und Schlichtheit, die das Wesen der Hirsauer Schule ausmachen.
Notes	守屋謙二先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0217

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アルピルスバッハ僧院教会の建築

渋 谷 勝 久
Katsuhisa Shibuya

Der Bau der Klosterkirche Alpirsbach

Resümee

Die Klosterkirche Alpirsbach gehört zur sogenannten Hirsauer Schule, die unter dem Einfluß von Cluny steht. Die von dem französischen Benediktinerkloster Cluny ausgehende Reform besteht in einer liturgischen Neuordnung, die sich im Baustil als Rückbesinnung auf die ursprüngliche christliche Gestalt auswirkt. Dieser cluniazensischen Bewegung schloß sich Kloster Hirsau im Schwarzwald an, das seinerseits mehr als hundert Kirchen reformierte. Während jedoch St. Peter und Paul in Hirsau heute fast völlig zerstört ist, läßt sich der Hirsauer Geist in der nicht weit davon entfernt gelegenen Klosterkirche Alpirsbach noch sehr deutlich erkennen. Alpirsbach ist eine flachgedeckte Säulenbasilika und verzichtet als Wegbau wie alle Kirchen der Hirsauer Schule auf Westwerk und Krypta. Entsprechend der hierarchischen Gliederung des Konvents ist die Kirche in verschiedene in ihrer Bedeutung abgestufte Teile eingeteilt. Dem Altarhaus nach Westen in der Vierung vorgelagert ist der Chorus maior, der durch ein Paar kräftiger Säulen von dem sich ihm anschließenden Chorus minor abgetrennt ist. Dieser wiederum wird durch Pfeiler von dem übrigen, den Laien vorbehaltenen Teil der Kirche sbgeschieden.

Der innerlich wie äußerlich fast schmucklose, flächenhafte Bau,

die klare Überschaubarkeit des Grundrisses—das quadratische Grundrißschema in der Gestalt des lateinischen Kreuzes mit einem Atrium im Westen wird streng beachtet-sind Beweise für die Einfachheit und Schlichtheit, die das Wesen der Hirsauer Schule ausmachen.

1.

南ドイツのフランス国境に近いシュヴァルツヴァルトの山中，フロイデンシュタットの南方17キロ離れたところにアルピルスバッハと云う小さな村落がある．シュヴァルツヴァルトは元来，領主のいない，皇帝の直轄地であったが，11世紀に貴族の領有に帰し，そこに新たに教会や僧院が建立された．アルピルスバッハに建てられた僧院教会は，ベネディクト派に属していたため，東フランスのクリュニイで10世紀に始まった同宗派の改革運動の影響を直接受けることになった．当時，ベネディクト派は財に富み，自然，聖職者達も世俗化して行ったので，クリュニイの教会ではその弊を正し，古来のキリスト教の正しい姿に戻そうとして単純で虚飾のない僧侶の生活及びそれにふさわしい建築様式を考察し実行に移した．

クリュニイの建築を端的に云えば，その精神的生活態度に即応して，10世紀の終りに Atrium を造り，Krypta を廃止し，そして Säulenarkaden によって教会本堂を分離した．しかし，すべての教会で統一的な建築様式を採用したのではなく，個々の典礼に制約された建築の部分で，同じ傾向が見られるのである．けれども，建築全体としてはその地方特有の地形に左右されている．

このような建築様式は，いわゆるヒルザウ派の建築に最も顕著に現れている．アルピルスバッハ教会も，このヒルザウ派に属し，この派の教会として他に Münster St. Peter und Paul in Hirsau, Säulenbasilika von Paulinzelle in Thüringen, Prüfening, St. Godehard in Hildesheim, Allerheiligen in Schaffhausen 等があるが，現在はアルピルスバッハの

教会が最もよく保存され，他は殆んど廃墟と化している．それ故，本論攻では，ヒルザウ派の典型として，アルピルスバッハを中心として，いわゆるヒルザウ派の精神と建築様式を描出して見たいと思う．

2.

1093年ツェーリンゲンの候爵ベルトホルト2世は，シュヴァルツヴァルトに St. Peter と云うベネディクト派の修道院を建て，それと殆んど時を同じくしてアルピルスバッハの教会の建立も始められた．この教会の建立は，ルオトマン・フォン・ハウゼン，アーダルベルト・フォン・ツォロンの諸貴族の寄進によって始められ，その寄進額は1095年から1099年にかけて増大された．1101年に教皇パシャーリス2世はこの寄進を承認し，更にこの教会に対して，修道院長を自由に選択する権利を与えた．1123年に至って初めて，皇帝ハインリッヒ5世がこの教会を承認する．

前述の幾つかのベネディクト派修道院は，ブルグンドの教会クリュニイから始まった修道院生活の改革を支持し，自らも改革を行った．皇帝と教皇との間の，彼のいまわしい叙任争い Investiturstreit に際し，St. Blasien と Hirsau は，アルプス以北の地での教皇側の主要な支持者であった．

St. Blasien の僧侶の手によって確立されたアルピルスバッハも，クリュニイの改革の影響を受けたが，しかし，St. Blasien や Hirsau ほどの精神的政治的意義を有することは出来なかった．

100 を越える教会が Hirsau を基として改革されたが，Speyer, Mainz, Maria Laach 等の皇帝の建立した教会と対立する意味で，改革された建築と称することが出来るかどうかは疑わしい．何故なら，皇帝側の建築の仕様もまた直接，改革と関連しているからである．壮大な皇帝による建築と，素朴な修道院の建築とを区別するものを Investiturstreit による政治的対立の表現と見なすべきではない．既にカール大帝の時代，即ち Investiturstreit がまだなかった時に，皇帝による建築様式に，上述の同じ様な長所が顕著に出ているのである．建築史的には，クリュニイと云う典型に従って Hirsau の修道院長ヴィルヘルムによってとり入れられた修道僧 Priestermönche と助修士 Laienbrüder, Konversen との厳正な区別が強く作用していたのである．Hirsau の伝統が明らかに脈打っている建築様式に，この区別は特によく現れている．Hirsau の St. Peter und Paul 教会は，修道院長ヴィルヘルムが彼の理念を実現した，天井を平面にした Säulenbasilika の典型である．この教会は 1692 年フランス人の手によって破壊され，現在はその基礎と Atrium にある塔のみが残されているに過ぎない．元来は，クリュニイに倣って，建物の西方に，Atrium の各々の端に夫々一つの塔が建っていたのである．長方形の平面図は lateinisches Kreuz (Kreuz には約 16 種類があるが，最も単純なキリストの十字架形がこれに当る）の形姿を厳しく守っている．43 メートルの長さを所有する主身廊は，丁度 4 つの正方形を連ねた形をなしており，両側身廊は，その半分の幅を有している．

ヒルザウの影響を受けた教会は上述の如く数多くあるが，しかし，これを「ヒルザウ派」建築と称することは出来ない．何故なら，ヒルザウによって改革された諸教会の間に必ずしも密接な関連を有する基本的な要因が

ないからである．この諸教会に共通しているものは典礼の改革であり，内部の新しい秩序づけだからである．そして，建築様式の単純化であり，これがベネディクト派に属するクリュリイ修道会の規範である．

3.

上述の如く，アルピルスバッハ僧侶教会はヒルザウの精神を受けつぎ，現在最もよく保存されているものである．アルピルスバッハの建築計画は，修道院の四角形を示し，その北側に教会を取り入れている．その一方では僧院の庭 Kreuzgarten を僧院の翼が取り囲んでいる．この様に，僧院の全体の配置は，古いベネディクト派の規範に従っている．

アルピルスバッハ僧院教会も，平天井の Säulenbasilika であり，その長方形の平面図も lateinisches Kreuz の形姿に従っている．主身廊の上部には純粋にロマネスク式の窓が連なり，西方の桟敷席には，比較的短い二本の支柱を有する四つのアーチがある．東方の袖廊にも南北に桟敷席がある．身廊の六脚の支柱間のアーチ Rundbogenfries の上部に波形紋様 Zickzackfries がある以外は，全く平面で何等の装飾もなされていない．側身廊も平天井であり，穹窿は見出されない．僅かに祭壇建築の東部と，その南部に隣接する祭室に穹窿が見られるだけである．

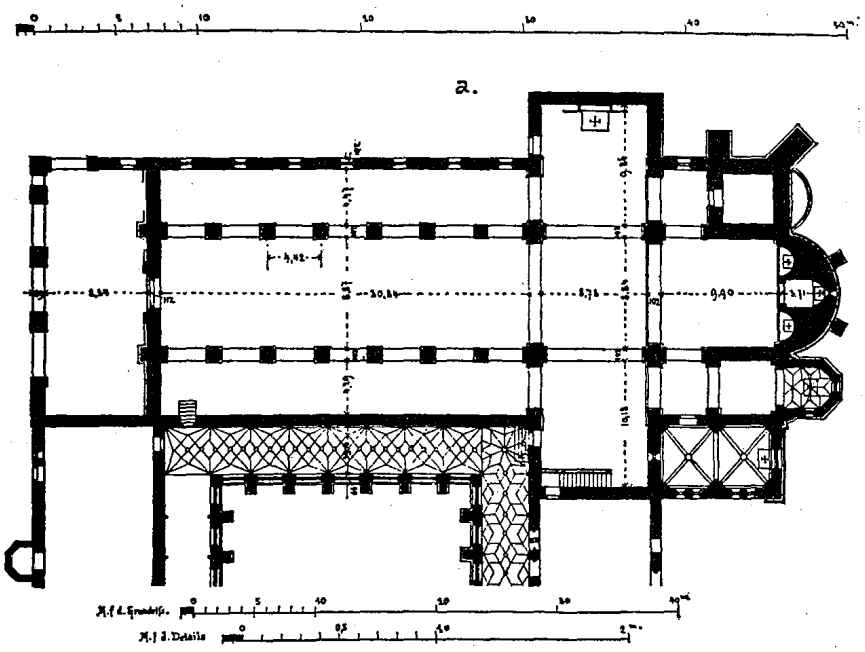
この様に全く単純化された教会内部で特に目立つのは，その六脚の支柱である．内陣交叉部までの左右各々六本の支柱の中，西方の四本は枡形柱頭を有し，五，六番目の柱頭には各々異った装飾がなされているが，全ての柱の上のアーチは四角形に囲まれており，これが「ヒルザウ派」建築の一つの真正なモティーフとなっている．内陣交叉部の四本の柱と，その両方にある最初の五本の柱はロマネスクの円柱であるが，六本目の柱は正方形を形造っているが，これはアルピルスバッハ及びパウリンツェレの僧院教会（約1112年-1132年建立）特有のものである．だがいわゆるヒルザウ派の様式に属し，またヒルザウの教会の影響を受けた100以上の教会に，

この両者以外その例を見ないのは何故であろうか.

一つには内陣交叉部に続く西方の一区劃は，副内陣 Chorus minor と呼ばれ，中央祭壇 Hochaltar を有する主内陣 Chorus maior から区別されているがためである．しかし，それだけならば St. Peter und Paul 教会の様に Chorus minor の支柱の如く内陣交叉部の四本柱と同型であっても構わないのではないか．周知の様にヒルデスハイムの St. Michael では側身廊は，中央身廊のアーケードによって区切られ，そのアーケードは，方形間の隅を強めるための角柱とその間の円柱とをａｂｂａｂｂａ (a は方形の積柱を b は円柱を夫々示す) とを交互に並べたもの Stützenwechsel であった．袖廊もまた外側に矩形部分のついた方形間を中心とし，この中心の方形間は，内陣のアーチによって東西に対してのみでなく，南北からもはっきりと独立させられている．ここでは，東方部で方形の内陣が後陣と交叉部との中間に設けられ，袖廊から分れた二つの祭室が，中央の後陣と平行に置かれている．

誰がこの「韻律的システム」を採用したかは不明であるが，聖ミヒャエル教会建立の責任者である聖ベルンヴァルト僧正が，この設計に関与した事実のみは確実であり，彼の着想と考えることも出来る．この Stützenwechsel は次第に中部ヨーロッパの当時の趨勢となった．アルピルスバッハ及びパウリンツェレの僧院教会にも，この Stützenwechsel が Chorus minor にのみ，他の身廊と区別するために用いられたとも考えられる．しかし，何が故に，アルピルスバッハに，更に遠く離れてパウリンツェレにだけ，Stützenwechsel の影響としか考えられぬ様式が取り入れられたかは全く不明である．

ここで何故 Chorus maior と Chorus minor が区別されたかについて語らねばならない．アルピルスバッハ僧院教会の範型となったクリュニイの改築された Säulenbasilika は 981 年に完成したが，その平面図はその廃墟の発掘によって明らかである．改革に伴い典礼もまた新しい形をと



り，聖者の典礼は大規模となり，すべての僧侶が毎日ミサを行わねばならなかったので，当然，教会内の宗教関係者が位置する場所も変容を余儀なくされた．クリュニイの平面図は，その流れを汲むドイツの僧院でも，夫々の仕方で変化を見せてはいるが，しかし，典礼の新しい形に伴う建築様式はクリュニイの根源的思想を，そのいずれに於ても受けついでいる．アルピルスバッハ教会も，クリュニイと同じく，七つの Joch と Basilika の形をとる身廊を有している．Basilika は初期キリスト教の教会建築を再び意識したものであり，初期に於てそうであった如く，円形の支柱が再び強調されるのであり，平天井も建築の安易さと云うよりも，初期の Basilika の再現として把握さるべきである．かくて，皇帝による教会建築に見られる如き，西方の第二の内陣は考慮の余地はなかった．何故なら，Basilika には本来，そうした構築物はなく，東方へと志向する方向建築 Wegbau であり，そのため，東方への道を分断する Krypta は消滅し，再び西側の入口に Atrium が考え出されたのである．Centula や Corvey 等に見られる西方建築 Westwerk は集中建築 Zentralbau の思想の反映で，いわ

ゆるヒルザウ派の Wegbau の理念と背馳するものである.

しかし, Westwerk が消失し, 典礼そのものが大規模となると, 当然, 身廊内部での変化がなければ, 数を増した僧侶 Priester や僧士 Mönch のいる場所がなくなって来る. 更に僧院教会の形姿に於ては, 僧院の階級制度が明らかになって来た. 教会は身分に応じて礼拝の際に三つに分たれるようになった. 第一に中央祭壇のある場所は礼拝に直接重要な役割を果す僧侶のいるところとして規定された. そこには中央祭壇があり, その外にどっしりとした下部建築の中に三つの凹所に, 夫々一つの祭壇があり, 更に, 中央の凹所の上にまた一つの祭壇がある. これはアルピルスバッハ教会の特徴の一つであるが, この様に五つの祭壇があるのは, この修道会の典礼の秩序によるものである. 第二は, 礼拝の際に聖歌を合唱する僧侶は Chorus maior に位置する. 第三に, Chorus minor には, 老僧侶や病気のために礼拝に直接の役割を果し得ない者が位置する. そして, 両袖廊には助修士が位置する. 数会に属する全ての人々が建物内部東方に位置し, 他の人々は西方にと厳密に区別されたのである.

アルピルスバッハで特に目立つのは, 後陣に接している礼拝堂の東端に立つ塔の位置である. その位置は南ドイツの同時代の改革された教会からは, 例証を求めることが出来ない. 「ヒルザウ派」の理想的な形としては, Atrium の前方に側して 2 つの塔を左右に配し, 側身廊の東の Joch の上に 2 つの塔を建てることであったが, この理念は一度も実現を見ず, 最上の場合に 2 つの塔が建設されたに過ぎない. アルピルスバッハでもこの基本理念に従い, 教会の北東部に 1 つの塔が建てられたに過ぎない. ただ東方のみに塔を建てた例としては, ヒルザウの Prioratskirche Klosterreichenbach (1080 年完成) を挙げることが出来る. そこでは内陣と中堂の間の角に 2 つの東塔が建てられていた(現在は改築されている). それ以外では, シュウァーベン地方で聖堂区教会 Pfarrkirche では, アルピルスバッハの東塔の位置は普通である. この塔の位置はベネディクト派の礼拝

の場合，重要な役割を果す鐘の響きと典礼が比較的容易に相互に意志の疎通を見る，実際上の利点があったと考えられ得る．

アルピルスバッハ僧侶教会が，何年に建て始められたか，また，何年に完成したか正確な資料は残されていない．しかし，おそらく1120年以前であったと考えられ得る．その唯1つの理由となるものは，西方の主玄関にある Tympanon の浮彫が，その形式から判断して1120年以前ではなく，むしろそれ以後に創られたと考えられるからである．

それまでに袖廊と後陣を有する中堂は完成し，塔は天井の高さと同じ部分まで完成していた．間もなく，その上方に塔の二階の建築が始められたが，そこは持送りと角の壁柱の上のアーチ模様によって豊かな外観を備えるに至った．これは12世紀の中期のことで，エルザス地方の影響が認められる．それに続いて，既にゴティックの時代になって，形式的にはその下の階層と等一化を図った壁柱の構成を有する三階が造られた．鐘のある最上階も，同様な壁柱を有しているが，これは後期ゴティック様式に統一されている．古い建築の部分を使用することもなく，典型的なゴティック式の窓でもないが，その窓は後に取り着けられたものである．ゴティック様式の三，四階の内部では，小さく切られた石で造られた壁の構成が，明らかに，ロマネスク式の大きな切石の一，二階のそれと区別され得る．ゴティックの壁面の特徴は，石を持ち上げるために使用された鉗子がうがった穴である．これはロマネスク時代以後になって初めて使用されたものである．

ゴティック様式の三，四階が全く装飾がないことと石の切込み模様 Steinmetzzeichen が欠けていることは，塔の建築を時代的に秩序立てることを困難にしている．屋根はその姿から見て，16世紀，ルネッサンスのものと思われる．

後陣の南側にある礼拝堂に隣接する祭室は2つの Joch を有し，その新築は教会のロマネスク様式の統一性を乱すものであり，それは前からあった壁面を使用し（それは南側の壁に2つのロマネスク式の窓を有してい

た)，13世紀に建てられたものである．その祭室は15世紀になると，東方へ，1つのより大きなゴティック様式の飾り窓 Maßwerkfenster を有するようになる．石造持送りは，これを作った者のマウルブロン修道院との関連，従ってブルグンドの建築様式との関連があることを証査している．南面にある有名な Mondsichelzeichen は，マウルブロン修道院によく見られるところである．

15世紀に行われた教会の改築には，教会の古い形姿は重要視されなかった．後陣では，そのどっしりとした下部建築のみがロマネスク様式のままに残され，上部はゴティックの Maßwerkfenster が採用された．従来の後陣の形姿がどの様であったかを，現在知ることは出来ない．

15世紀に，中庭を取囲む廻廊 Kreuzgang に，僧院長ヒエロニスム・フルツィンクによって二階が作られ，そこが僧侶の寝室に当てられ，それと共に，南側の側身廊と Kreuzgang の二階との間に新たに窓を作り，両者の関係を密接なものとした．

最後に，内陣の南に隣接する礼拝堂（通称 Sulzer Kapelle）が拡大され，その東部に小さな内陣が附け加えられた．ここでもまた，ロマネスク様式の後陣がその形姿を失うに至った．星形の穹窿 Sterngewölbe の要石の紋章が，1505年に選ばれた僧院長アレクシウスのものであるところから，その建築が16世紀の初めに行われたことは確実である．

中央身廊と袖廊のロマネスク式破風が元来のものより高くなったことの契機は明らかでない（元来のロマネスク式の破風の高さは袖廊の南翼で明らかに認め得る）．1508年及び1513年の火災がその契機であったかどうかは疑わしい．何故なら，この場合には，石の素材に火災の痕跡が確かめられるはずだからである．屋根の構成の様式からして，破風が高くなったのは16世紀の初めとも考えられる．それは多分，中庭を取囲む廻廊 Kreuzgang の二階が構築された際に，教会と僧院の屋根の高さを適合させる希望があったことに由来するものであろう．

教会の建築で興味のある1つの部分は，その Atrium (Narthex) である．2つの事実からして，その成立はロマネスク様式のものであることを証査している．第一に Atrium の北側にあるアーチをなしている入口であり，第二に，その壁面が側身廊の外壁と全く区別するものがないことである．この様にロマネスク時代にその建築が始められたのに，3つの半円球の大きなアーチと，一つの小さな上部のとがったアーチはゴティック様式であり，何故，その完成がゴティック時代に持ち込されたかは不明である．或は，ゴティック時代に改築が行われたのかも知れない．最初の建築計画書によると Atrium は二階を有し，教会側に面して2つの窓を有するはずであった．そこは3つの部屋に分れることになっており，その中央の部屋には僧院長の貴賓が席を取り，礼拝を見ることが出来ることになっていた．この Atrium から教会西方の桟敷席に通ずる2つのロマネスク様式の入口が閉ざされていることを今日でも明らかに見ることが出来る．現在残っている桟敷席は，この様に本来は Atrium の二階の中央の部屋に属すべきものであった．

教会の外面は殆んど装飾がなく，単純化されている．壁面の石は赤色を呈しており，シュヴァルツヴァルトのアルピルスバッハに近い地方からのみ採石されたと考えられる．Atrium と教会とを隔てる壁面，特に外側の中央の壁面は殊の外，念入りに加工されている．それ以外，石工の仕事は粗雑で単純であるが，唯一つの例外は中央入口の上の Tympanon の浮彫で，それは多分北イタリヤの人の手になったものらしく，見事な彫刻がほどこされている．その浮彫の半円形には Ego sum ostium dicit dominus per me si quis introierit salvabitur. と記されている．中央入口の扉にはロマネスクの装飾がなされており，扉は皮におおわれた2枚の扉であり，いその環状の把手は，ロマネスク様式の青銅製の獅子頭の口につながってる．

教会の内部が非常に高いと云う印象を受けるが，天井が高く，中堂の幅

が狭く，その上，主身廊の窓の位置が高く，内陣交叉部のアーチの位置も高いところから，この印象が生れるのである．しかし，その一方に於て，中央身廊，側身廊が濃色の木材の天井であり，前述の様に，力強い太い身廊の支柱は，教会が外界と隔絶され，ここに身を置く人が，閉ざされた世界の中で，休らぎの念を感ずるのである．教会内部の装飾は極めて少ないが前述の Chorus minor の支柱にほどこされた装飾は，芸術作品のためと云うよりも，Chorus minor を他から区別させるためと考えられる．Zickzackfries も装飾のためと云うより，それより上部の白壁を際立たしめ，中央身廊の高さを，より一層意識させるのに役立っていると考えられる．中央身廊の窓は，12世紀には，色のついた窓ガラスを用いていた（今日その一部が残っている）．

後陣や南側身廊の外面のゴティック様式は，アルピルスバッハ僧院教会が，それにも拘らずなお典型的なロマネスク様式であると云う全体的印象を損ねていないのである．

参 考 文 献

Mettler, A. Die Kirchen und Klöster der Hirsau und Zisterzienser, 1927.
Dechio, G. Geschichte der deutschen Kunst, 1930. 2 Bde. Berlin u. Leibzig.
Mettler, A. Kloster Hirsau, 1937.
Lehmann, E. Der frühere deutsche Kirchenbau, Berlin 1949.
Hempel, E. Geschichte der deutschen Baukunst, München 1949.
Hoffmann, W. Hirsau und die Hirsauer Bauschule, 1950.
Koepf, H. Baukunst in fünf Jahrtausenden, Stuttgart 1954.
Reitzenstein, A. F. v. Deutsche Baukunst, Stuttgart 1956.
Saalman, H. Architektur des frühen Mittelalters, Ravensburg 1963.
Busch, H. Germania Romanica, Wien u. München 1963.
Adam, E. Baukunst des Mittelalters I., Berlin. 1963.

Schmidt, R. Kloster Alpirsbach, 1964.
ニコラウス・ペヴスナー著 小林文次 訳 ヨーロッパ建築序説 1867.

牡丹図（亦復一楽帖の内）　田能村竹田筆

利堂 印刷